

フロアからのコメント

司会 それでは本日、お越しのみなさんから、ご登壇の先生方へのご質問がありましたらお受けしたいと思います。

井上勝也（同志社大学名誉教授） 文学部にありました井上勝也です。人文研にお世話になりましたのは1970～80年代の頃、本日の最初のお二人のご提言に対して、とりわけ関心をもって拝聴しました。小山先生は所長として、この後、人文研の将来計画についてお話されると思いますが、私は本井先生、吉田先生のご提言に対して、現在の人文研を活性化させる、日本の同志社の人文研という栄光を取り戻すためにも、ぜひ小山先生に責任者としてがんばっていただきたいと思っていますところです。

小山 ありがとうございます。がんばります。全体を通しての提言については全く同意します。ただし、CSのみをターゲットにするのかというと、必ずしもそうでは無いだろうとは思っています。CSだけを特別に特化する形ではなく、ただしCSも含めて、何とかもっと活性化していかないといけないというご指摘としては100%、同意します。

司会 他にいかがでしょうか。

西田毅（同志社大学名誉教授） 今日は三人の先生方から人文研の活動について、興味深いお話を伺うことができました。人文研と私の個人的な関わりを含めまして、私が常日頃、考えている研究所の意義や特徴について少しお話しさせていただきたいと思えます。多少、個人的な回顧談にふれるかもしれませんが、その点

は本日のシンポジウムのテーマである「同志社大学人文研の過去・現在・未来」の趣旨に免じてご容赦賜わりたいと存じます。

私は1962年に法学部助手に採用されまして、関係した最初の仕事は、実は人文研が取り上げたテーマでありました。それは共同研究「京都府民の選挙行動と政治意識」です。1959年に発足した「近代京都における社会発展の諸条件の研究」の第二班 教育・行政・政治の代表委員であった法学部の高橋貞三教授から、これは京都府の選挙管理委員会から同志社人文研に依頼された調査研究で、「是非引き受けて欲しい」というお話がきたのです。その頃の京都はちょうど蜷川（虎三）革新府政の全盛時代で、社会党や共産党が強く、大学や神社仏閣等の宗教人、そして医師会や教職員組合が革新勢力の支持基盤であることから、東京や大阪とは違った古都の「観念左翼」の意識構造に対する関心もあって、京都の革新勢力の強さが全国的に注目されていたこともあり、私の関心が動いたことは事実でした。人文研におられた太田雅夫さん、法学部助手の金丸輝男さんと私の三人で法学部政治学科の学生諸君に面接インタビューや集計を依頼し、大学院生に分析作業を手伝っていただいて京都府第一区の有権者の投票行動や意識調査を実施しました。ただ、私を含めて太田・金丸両氏ともに、投票行動の分析や実態調査といったフィールド・ワークを専門的に研究する者ではありません。その点を非常に意識しましたが、この仕事に参加したおかげで、有権者の投票行動や政党支持の態度、政治意識と政治的関心など、具体的な選挙と政治分析に対する関心が高まったことも事実です。

そして、この共同研究が1964年度の日本政治学会大会報告（「選挙にあらわれた政治意識—京都府第一区の場合」）につながりました。学会報告は65年『年報政治学』（岩波書店刊）に掲載され、また実態調査の報告は、『京都市民の政治意識と投票行動—昭和38年12月総選挙の実態調査—』（1964年、同志社大学人文科学研究所刊）に収録されています。私の貧弱な研究史のなかで、その出来映えは兎も角として、ちょうど研究者としてのスタートの時点で、予期せぬ大きな仕事を人文研から与えられたわけであります。

その後、私は人文研所長職に任命され、研究所の行政にも係わりました。研究面では専従研究員に任命され、「キリスト教社会問題研究会」（通称CS研究会）には1960年代の後半から退職までずっと所属し、会員として幾つかのプロジェクトに参加させていただきました。

CS研究会は「熊本バンド研究」や「民友社の研究」、「戦時下抵抗の研究」、「山室軍平研究」、「排耶論の研究」など次々とプロジェクトを立ち上げ、成果を公表してきました。私の「民友社研究」や「海老名弾正研究」は、CS研究会所属の諸先輩方との貴重な討論によって関心が高まり、問題意識が深められたことは事実で、先学の学恩に改めて感謝する次第であります。

研究所の他の研究グループ、たとえば企業・産業組織や京都を中心とした近畿地域史研究、そして新設の現代社会研究—ラテンアメリカ研究—など、そのくわしい実態はよく知らなかったのですが、今日のご報告によっていろいろ新しい知見を得ることがで

きました。

CS 研究会は確かに人文研の花ではありますが、その構成員の顔ぶれや特色ある研究テーマの設定、そして研究会の運営の仕方、研究成果を着実に紀要や刊本のかたちにまとめあげる組織力などすぐれた特徴を持っていたと思います。京大をはじめ他大学の研究者、そしてF・G・ノートヘルファーさんやジョン・D・ピアソンさんら海外の日本研究者も一時期研究所におられたと思いますが、それに学内の大学の長老教授だけでなく、女子大はじめ諸学校のメンバーも研究会に参加して、自由に報告を行い、討議していた光景をよく覚えております。参加者の立場や方法論も多様で、共通のテーマをめぐって多様な見解を述べておられました。そこには、長老教授が主宰する研究会や大学のゼミのように、特定教授の世界観や方法論に縛られると云った空気は全くなく、テーマに対する接近視角も自由で多様性が支配していました。研究会の司会を担当された杉井（六郎）先生も、ときにご自分より年齢が上の文学部の今中寛司先生や和田洋一先生らが参加されることもあってか、強引に研究会を引っ張っていくという態度は見せられませんでした。常連の出席者に神学部の土肥昭夫、竹中正夫の両先生、文学部の小倉襄二氏、外部からは京大の飯沼二郎、京都精華大学の笠原芳光氏らがおられました。

思想的にも学問の方法論から云っても、多様な方が集まっていたと思います。それに専門の研究者だけでなく、ディレタントとか、素人で趣味的に学問をする人にも門戸が開かれていたと思います。

CS研究会が人文研に正式に所属するようになったのは1959年度であったと思いますが、それ以前から有志の研究団体が組織されていました。住谷悦治先生を代表者とする15名の連名で呼びかけの「趣意」書が1956年に発表されています。そこには「日本社会の近代化の先頭には常にプロテスタント、とくに組合教会員、同志社の先輩が立っていたといっても過言ではない」として、ラーネッド、小崎弘道、宮川経輝、海老名弾正、山室軍平、柏木義円、安部磯雄、浮田和民、中島重、山川均らの名前を挙げて、彼らが社会思想、社会運動、社会事業に深くかかわって、それらの分野で先駆者的役割を果たしたこと、それゆえに同志社が中心になって関係する資料の蒐集や整理、研究を行うことの重要性を強調しています。

先ほどの本井先生のお話で杉井先生のお名前が出てきました。杉井さんが1960年代の初めに同志社高校から人文研の専任研究員に来られる前に、実は住谷さんや篠田一人、高橋虔、和田洋一といった諸先生らの真摯な思いに支えられた動きがあり、それがその後のCS研究会の活動につながったのだと思います。いかに言えば、歴史的に見た同志社の存在意義は、C（キリスト教）とS（社会主義、社会運動）の分野における人材の輩出ということの再認識に立った研究会の組織化の試みとでもいいでしょうか、そうした誕生の原点を私たちは今一度、確認しておく必要があるのではないのでしょうか。

『同志社百年史』の刊行に人文研が大きな役割を果たしたというご指摘がありました。そうした見方に基本的に賛成ですが、同

時にまた『同志社百年史』には同志社特有のアンサンブル ensemble の味が出ていると思います。上野直蔵（総長）の陣頭指揮のもとに、企画委員長に今中寛司教授、そして社史史料編集所が編纂の事務局を担当、三十余名の執筆陣は大学の各学部を中心に女子大・中高の同志社学園全体から現役、退職者を問わず選ばれています。

このように人文研、社史、各学部教員、女子部や中高教員の皆さんが一致協力して、同志社が明治維新後の曲折を経た日本の近代化のなかで、どういう歩みをしたかという共通の視点を抱きながら執筆したのが『同志社百年史』であったと思います。したがって、そこには当然、「複数の視点」があり、上野総長の言葉を借りれば、それは「相対性の中から絶対性をまさぐる姿勢であり、ある意味で同志社らしい」という見方が成り立つわけであり、ます。

『同志社百年史』に見られる思想的、方法的多様性の承認が、過去に「同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分を隠すことなく記していること」、キリスト教に対する時の権力による敵視や迫害など、さまざまな圧迫から同志社を守るための先人の攻防の歴史が一つのドラマとなって読み手に迫る「百年史」に仕上がったのだと思います。

人文研のCS研究会が、戦後の歩みの中で培ってきた、自由で多様なアプローチを認め、研ぎ澄まされたシャープな研究も気楽な学問的懇談も許容する幅の広いアンサンブルの味を作り出したのではないかと思います。こうした伝統を尊重して、次の『百五十

年史』を是非、成功させていただきたいと願うところです。